小腸転移をきたした喉頭癌例

岸本 曜・庄司 和彦・池上 聡
鈴木 慎二・丸毛みゆき*・児嶋 剛

A Case of Laryngeal Carcinoma Metastasizing
to the Small Intestine

Yo Kishimoto, Kazuhiko Shoji, Satoshi Ikegami,
Shinji Suzuki and Tsuyoshi Kojima

(Tenri Hospital)

Miyuki Marumo

(Hyogo Prefectural Amagasaki Hospital)

We report a case of laryngeal carcinoma metastasizing to the small intestine. A 51-year-old man who had been treated for laryngeal carcinoma presented with abdominal pain. CT of the abdomen revealed hypertrophy of the ileum wall. There was an incomplete obstruction of ileum. After resection of the obstruction, the patient was free from abdominal pain and became able to eat. The specimen demonstrated an infiltration of the small intestine by squamous cell carcinoma, speculated to be from the larynx.

Key words : laryngeal carcinoma, metastasis, small intestine

はじめに

転移性小腸腫瘍の原発巣としてこれまで子宮頸癌、悪性黒色腫などが報告されているが、頭頸部癌からの遠隔転移は非常にまれである。今回われわれは喉頭癌からの小腸転移例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

症 例

症例：51歳，男性。

主訴：腹痛，発熱。

既往歴：アルコール性肝硬変。

現病歴：平成14年2月，S状結腸憩室炎穿孔に対し当院腹部外科で手術を行った。術前に行った上部消化管内視鏡で喉頭に腫瘍を指摘されたため2月8日当科紹介となり，精査の結果，喉頭癌（声門上 T2N2bM0）と診断

された。肝硬変のため手術のリスクが高いことを説明したところ，患者は放射線治療を希望し，2月25日から4月8日の間に69.6 Gyの照射（CDDP 50 mg/body/週の化学療法を併用）を行った。照射終了時頸部リンパ節はほとんど触知しなくなっていたため外来にて経過観察していたが，同年7月に頸部超音波検査にて右側頸部に腫大したリンパ節を認め，右保存的頸部郭清術を行った。組織検査にて扁平上皮癌のリンパ管浸潤を指摘された。同年11月にも右側頸部郭清範囲外に腫瘍を指摘され，同部の郭清を行った。この腫瘍にはリンパ節の構造はなく脈管への転移が疑われた。

その後外来で経過観察していたが，平成15年4月に右耳下部に癌の再発を認めた。癌は頸動脈を囲むように存在し境界不明瞭であった。手術の適応はないと判断し対症療法を行っていたところ，5月に発熱，腹痛を主訴に

天理よろづ相談所病院耳鼻咽喉科

* 兵庫県立尼崎病院耳鼻咽喉科

図 1 腹部 X 線
イレウスの像を呈していた。

当院救急外来を受診し、イレウスの診断で腹部外科入院となった。

入院時理学的所見：貧血，黄疸を認め，栄養状態は不良であった。喉頭の原因巣には再発を認めなかった。頸部触診では右耳下部の腫張と同部の膿瘍形成を認め，発熱，炎症所見の原因と考えられた。腹部触診では右肋弓下で肝を 3 横指触知し，臍部を中心に圧痛を認めた。

入院時一般検査所見：赤血球： $304 \times 10^4/\mu\text{l}$ ，Hb：10.2 g/dl，Ht：29.2%，白血球： $12000/\mu\text{l}$ ，CRP：8.3 mg/dl，Plt： $15.4 \times 10^4/\mu\text{l}$ ，BUN：10.7 mg/dl，CRE：0.8 mg/dl，TP：7.2 g/dl，ALB：2.7 g/dl，LDH：159 IU/L，GOT：26 IU/L，T-Bil：2.2 mg/dl。

画像所見：腹部 X 線では niveau，Kerckring ヒダを認めイレウスの像を呈していた（図 1）。

胸部 CT では縦隔リンパ節は前縦隔リンパ節，気管傍リンパ節，傍大動脈リンパ節，大動脈弓下リンパ節，気管気管支リンパ節，気管分岐下リンパ節の腫大を認め，癌性リンパ管症の像を呈していた。その他両肺野に胸水，

図 2 腹部 CT
壁肥厚に伴う不完全狭窄を認めた（▷）。

左 S6 に転移を認めた。

腹部 CT では肝硬変像，少量の腹水と，下腹部に数カ所の小腸狭窄を起点とした小腸の拡張を認めた。狭窄部は管腔が保たれており不完全閉塞と考えられた（図 2）。

小腸造影ではガストログラフィンの通過障害を認めた（図 3）。

病歴より，狭窄の原因として結腸憩室炎術後の癒着，喉頭癌の小腸転移，感染・肝硬変に伴う末梢循環障害等が疑われた。画像所見上，狭窄部が前回術創から離れて多発していること，壁肥厚を伴うこと，狭窄部での屈曲がないこと等より癒着によるものとは考えにくく，また周囲の血管は造影されており，血流も保たれていることから循環障害によるものとも考えにくかった。そのため，喉頭癌の転移に伴う小腸狭窄を第一に疑った。

イレウス管を挿入し一度は症状が軽減するも，経口摂取を再開すると再びイレウスをきたすため保存的治療は難しいと判断し，当院腹部外科と相談の上，手術を行った。

手術：平成 15 年 6 月 30 日，全身麻酔下に回腸部分切除を行った（図 4）。前回手術による癒着は軽度であった。回盲部より約 100 cm の回腸に，腸間膜附着部よりびまん性に浸潤する腫瘍による約 6 cm の全周性狭窄を認め，同部の腸間膜リンパ節は弾性硬に腫大していた。狭窄部に 3～4 cm のマージンを設け切除し，根部のリンパ節も摘出した。手術時間は 101 分，出血量は 40 g であった。

摘出標本：腫瘍の浸潤に伴う約 6 cm の全周性狭窄を認めた（図 5）。

図3 小腸造影

a : 小腸での通過障害を認めた。

b : イレウスチューブ挿入により大腸へのガストログラフィンの流出を認めた。

図4 手術所見

回腸部分切除術を行った (△ : 狭窄部分)。

病理所見：中分化型扁平上皮癌の浸潤性増殖が粘膜固有層から漿膜下まで認められ、脈管侵襲も著明であった(図6)。病歴、小腸での原発性扁平上皮癌の頻度の少なさをより喉頭癌の転移と診断された。

術後経過：術後4日目より経口摂取が可能となり、退院の上外来にて経過観察を行っていたところ、平成15年8月に痙攣をきたした。頭部CTを撮影したところ脳転移が判明したため、再度入院となった。保存的治療を続けるも、その後全身状態は次第に悪化し同年8月25日死亡された。剖検は家族の同意を得られず行わなかった。

考 按

頭頸部癌の消化管への転移はまれである。小腸に関しても同様であり、転移性小腸腫瘍の原発巣としては子宮頸癌、腎癌から、その他腹腔外臓器では悪性黒色腫、肺癌からであることが多いと報告されている¹⁾²⁾。頭頸部領域の原発巣としてはこれまで喉頭のほか、上顎、軟口蓋等が報告されているがいずれも非常にまれである³⁾⁴⁾。

喉頭癌の遠隔転移に関して諸家の報告を省みると、その頻度は4.4～6.7%と報告されている^{5)～8)}。しかし、

図 5 摘出標本
約 6 cm の全周性狭窄を認めた (<).

図 6 病理所見
中分化型扁平上皮癌と診断された。

剖検例を検討した報告では 50% にのぼるとの報告もあり、実際の頻度はもう少し高いと考えられる⁹⁾。転移部位としては肺、骨、肝が多いとされており、まれな部位としては今回われわれが経験した小腸のほか、脾、胃等が報告されている^{5)6)9) ~ 12)}。宮原ら⁶⁾は喉頭扁平上皮癌

患者 213 例を検討し、遠隔転移の高危険群を transglottis を含む声門上癌 T3, T4, N1, N2b, pN2c 例としている。また Yoshihara ら¹³⁾は過去の報告を省み、喉頭癌のうち小腸転移をきたす危険性が高いものは声門上癌であると、さらに転移部位に関しては、空腸、回腸のいずれも

同程度の頻度としている。今回の症例はやはり声門上癌 N2b 症例であり、遠隔転移の高リスク群に属していたと考えられる。転移性小腸腫瘍では患者は一般に腹部膨満、腹痛、便秘、吐気・嘔吐等を訴え、消化管の閉塞、場合によっては穿孔をきたす²⁾¹⁴⁾¹⁵⁾。今回の症例では、症状出現の直前よりモルヒネの投与を開始していたため、モルヒネの副作用による便秘の増悪が疑われた。そのため画像検査を行うまでは症状と喉頭癌の遠隔転移の可能性を結びつけることは難しかった。

頭頸部癌であっても悪性腫瘍患者が上記症状を訴える場合、消化管への転移の可能性を考慮に入れ、腹部 X 線、CT、小腸透視、内視鏡等を行い、狭窄、腫瘍の有無を確認すべきだと考えられる。その際重複癌の可能性も念頭に置く必要がある。

小腸への転移形式としてはリンパ行性、バトソンの椎骨静脈叢等を経る血行性、そして腹部手術等による腹膜播種等が考えられる²⁾³⁾¹⁴⁾。なかでも腹腔内臓器原発の場合、直接浸潤や、播種性転移によることが多く、通常、管外性圧迫による狭窄をきたす⁴⁾。Yamada ら¹⁴⁾ は転移性腫瘍の腸管での顕在化を、免疫防御機構の崩壊に伴う腫瘍進展と結論づけているが、このように悪性腫瘍終末期の一部分症としてとらえられることが多い。これに対し、腹腔外臓器原発の場合、リンパ行性、血行性に粘膜下層や筋層に転移し、出血、潰瘍をきたしやすいとされている⁴⁾。今回の症例の場合は、腸間膜リンパ節への転移を認めたこと、癌性リンパ管症をきたしていたこと等よりリンパ行性転移の可能性、異時性ではあるが脳転移を認めたこと、肺転移を認めたこと等より血行性転移の可能性のいずれも考え得る^{16)~18)}。

治療に関しては、閉塞をきたしている場合、激しい痛みを伴うため、全身状態が許すなら手術による閉塞部位の切除を選ぶべきだと考える。われわれが渉猟し得た限りにおいては、化学療法により改善を示したという報告はなかった。小腸転移をきたす症例は、前述のとおり、通常はいわゆる悪性腫瘍終末期であることが多く、基本的に予後は不良である。そのため、予後の改善というよりむしろ患者の QOL の改善を目的とすべきであり、予後を考慮した必要最小限の手術は患者にとって非常に有益であると考ええる。本症例においても手術により患者は腹痛などの腹部症状から解放され、経口摂取が可能となった。諸家の報告でも転移性小腸腫瘍に対して姑息的な治療として切除を考慮すべきであると考察されてい

る²⁾¹⁹⁾²⁰⁾。

まとめ

非常にまれな喉頭癌小腸転移症例を経験した。進行癌、特に声門上癌においては腹部症状を訴えた場合、腹腔臓器への遠隔転移の可能性を念頭に置く必要があると考えられた。さらに小腸の閉塞をきたしている場合は、QOL の改善のため同部位を切除することを考慮に入れる必要があると考えられた。

参考文献

- 1) Potesan NL : Metastatic tumor to the small bowel; three cases simulating primary malignant tumors. *Am J Roentgenol Radium Ther Nucl Med* **99** : 122 ~ 126, 1967.
- 2) de Castro CA, Dockerty MB and Mayo CW : Metastatic tumors of the small intestines. *Surg Gynecol Obstet* **105** : 159 ~ 165, 1957.
- 3) Routh A and Hickman BT : Metastatic tumors of the small intestine; case report and review of literature. *J Miss State Med Assoc* **25** : 235 ~ 236, 1984.
- 4) 若原正幸, 田中千凱, 種村廣巳, 他 : 回腸に転移した上顎癌の 1 例. *日臨外* **61** : 628 ~ 631, 2000.
- 5) 近藤 隆, 河辺義孝 : 喉頭癌遠隔転移例の検討. *耳鼻臨床* **77** : 1459 ~ 1466, 1984.
- 6) 宮原 裕, 家根旦有, 鶴田至宏, 他 : 喉頭癌の臨床的検討. *日耳鼻* **105** : 790 ~ 798, 2002.
- 7) Spector JG, Sessions DG, Haughey BH, et al. : Delayed regional metastases, distant metastases, and second primary malignancies in squamous cell carcinomas of the larynx and hypopharynx. *Laryngoscope* **111** : 1079 ~ 1087, 2001.
- 8) Spector GJ : Distant metastases from laryngeal and hypopharyngeal cancer. *ORL J Otorhinolaryngol Relat Spec* **63** : 224 ~ 228, 2001.
- 9) Lam KY and Yuen AP : Cancer of the larynx in Hong Kong; a clinico-pathological study. *Eur J Surg Oncol* **22** : 166 ~ 170, 1996.
- 10) 糸数哲郎, 古謝静男, 真栄城徳秀, 他 : 当科における進行喉頭癌 (stage III, IV) 症例の検討. *耳喉頭頸* **71** : 27 ~ 30, 1999.
- 11) 伊藤 敬, 先本秀人, 中原英樹, 他 : 膈転移をきたした喉頭癌の 1 例. *広島医学* **42** : 969 ~ 972, 1989.
- 12) 若林 透, 川嶋 彰, 武田 正, 他 : 喉頭癌由来と考えられた転移性胃扁平上皮癌の 1 例. *Endoscopic Forum for Digestive Disease* **5** : 81 ~ 84, 1989.
- 13) Yoshihara T and Yamamura Y : An unusual case of laryngeal carcinoma metastasizing to the small intestine. *J Laryngol Otol*

- 111 : 575 ~ 577, 1997.
- 14) Yamada T, Yagi S, Tatsuzawa Y, et al. : Small intestinal metastasis from esophageal carcinoma associated with small intestinal obstruction; report of a case. *Surg Today* 26 : 800 ~ 802, 1996.
- 15) Ise N, Kotanagi H, Morii M, et al. : Small bowel perforation caused by metastasis from an extra-abdominal malignancy; report of three cases. *Surg Today* 31 : 358 ~ 362, 2001.
- 16) Alavi S, Namazie A, Sercarz JA, et al. : Distant lymphatic metastasis from head and neck cancer. *Ann Otol Rhinol Laryngol* 108 : 860 ~ 863, 1999.
- 17) Buyukcelik A, Ensari A, Sarioglu M, et al. : Squamous cell carcinoma of the larynx metastasized to the ampulla of Vater; report of a case. *Tumori* 89 : 199 ~ 201, 2003.
- 18) Yucel EA, Demirel T, Demiryont M, et al. : An unusual metastatic site of laryngeal carcinoma; scapular muscles. *J Laryngol Otol* 117 : 85 ~ 87, 2003.
- 19) Wang M, Patel J, Casey TT, et al. : Metastatic squamous cell carcinoma from the esophagus occurring as small bowel obstruction. *South Med J* 78 : 884 ~ 886, 1985.
- 20) Airoidi M, Gabriele P, Succo G, et al. : Small bowel metastasis from squamous cell carcinoma of the larynx; a case report. *Tumori* 79 : 286 ~ 287, 1993.
-
- 原稿受付 : 平成15年12月11日
原稿採択 : 平成16年 1 月14日
別刷請求先 : 岸本 曜
〒632-8552 天理市三島町200
天理よろづ相談所病院耳鼻咽喉科